



情報学部の海外研修

情報学部 関 哲 朗



数理統計学を学び、リサンプリング法を分布母数の推定に応用することで学位を取得。その後、モノづくりマネジメントの一方式であるプロジェクトマネジメントと出会い、これを研究領域の中心に据え現在に至る。日本信頼性学会理事（元）、プロジェクトマネジメント学会副会長、ISO PC236及びISO TC258国内対応委員長、HoD、日本代表エキスパートの他、企業との交流や国等の専門委員活動を通して得た理論と実践の知識を教育現場に展開している。
(せき てつろう)

世界的な情報化の進展は、これまで以上にボーダレスな協働を強めている。このような状況に対し、情報学部ではアジアを訪問する2つの海外研修を創設し、21世紀社会を生きる学生の資質養成に備えた。情報学部が海外研修のビジョンとするもの、アジアを目指す理由、これら2つの研修を創成するに至った経緯を概観し、研修の成果について言及する。

1. 海外研修事始め

情報学部は、創設以来30年余に渡り独自の海外研修を持たなかった。実のところ、これは正確な表現ではない。かつて、真鍋龍太郎先生（現名誉教授）が、北米でソフトウェア開発実習を含む研修を実施したことがある。北米を研修地として選んだことは納得がいく。多くの人の関心が、速くて性能の良いCPUやプログラムを作るための新しいコンパイラに集中した時期である。社会や生活への情報基盤の導入が始まった時期だ。これらはインテルやUCB、UCSDに新しい流れがあった。東海岸にもベル研究所やEDSがあり、ソフトウェアや情報システム開発の知識が米国から大量に発信されていた。残念なこと、この研修は一度きりで終わってしまった。バブルが弾けたことが、継続実施に大きな景を落としたようだ。

そこから随分と時間がたって、情報学部ではベトナム研修を創設した。2009年度のこと

である。よく疑問符付きで、「何でベトナム？」と聞かれる。この疑問符の大行列にも懲りず、次いで2011年度には、モンゴル研修を創設した。次に狙っているのは、実はミャンマーである。

2. なぜアジアを目指すのか

＜情報学部に海外研修を！＞

本稿の著者は、先掲の紹介文に示したような国際交渉の場に参画する機会を多く得てきた。Samsungや中国企業にモノづくりの指導に行く機会や中国の清華大学にできたばかりのソフトウェア学科などで学生に話す機会も与えられた。別にアジアばかりを訪問していたわけではない。一箇所に長く居たという意味ではコロラドやバージニアであって、北米や欧州にも随分行かせてもらった。それぞれに悩みも少なくなかったが、得難い経験も多かった。このような自らの経験を振り返って、学生には海外に目を向け、異文化、多文化の

存在、そして国際協働の必要性に気付いて欲しいと考えた。

<獅子身中の虫？>

先出の真鍋先生が定年を迎えられ、学部での国際交流の役回りを与えられた。早速、情報学部の海外研修を創設しようと考えた。そこで、学生を見つけては、海外研修への興味を聞いてみた。ほぼ、全員が同じ答えを返してきた。「海外は怖い」、「国際交流は国際学部の人ができることだ」、「お金がない」。資金面はともかく、怖いとか学部が違うとか言われるとは。しかも、ほぼ全員がパスポートを持っていない。思わず、「皆さん、どの時代を生きているんですか？」と言いたくなるような惨状であった。

ここでちょっと気後れはしたものの、「啓発」をキーワードに研修の開発に取りかかった。このとき、「語学力の修得は副次的成果とし、多文化の中でのコミュニケーション力養成を主目的とする」、「人間、国が意欲的に生きる力を目の当たりにする」、「将来のビジネス・パートナーとなる友人を獲得する」の3つをビジョンとして掲げた。情報社会を生き抜く人間力養成を研修開発の基礎に置くことで、本学が従来設置してきた海外研修との差別化を図り、情報学部に不足している学びを補うものにしようとしたのである。

<ベトナムへ行こう！>

研修先として選んだベトナムは、このビジョンを十分に満たしていた。日本と似てる、「だけど」がこの国にはあった。この国の大学生が背負っている歴史的な背景は日本のそれよりもはるかに身近であり、辛辣である。大学生の日々の生活も、学習環境も決して日本の水準には及ばない。しかし、ベトナムの大学生の気持ちは、多くの日本人学生よりも前向きである。発展途上国の若者に共通する「自分がやらなければ、国を作らなければ」という気概があった。そして、ベトナムはビジネス・パートナーとして日本を強く望んでいた。そこには情報学部の学生に見せたい、触れさせたい人と大地の情熱が溢れていた。

<なぜアジアに行くのか？>

ベトナムには日本との協業を目指す企業があった。ベトナムでビジネスを興す日本企業があった。そして、FPT大学という進取の精神に溢れる当地のトップ大学にも出会えた。多くの人達の理解と協力でベトナム研修は成立した。モンゴル研修は、国際学部の生田祐子先生のご友人から本学に申し入れがあったことに始まる。実のところ、この話しを最初は見送った。朝青龍以外にモンゴルの知識が無かったからだ。ところが、調べてみると実に興味深い。日本が経験してきたモータリゼーション、公害問題が現在進行形で存在した。人が生きるために自然が破壊されている。求められる日本の金と企業と人。この国の情報爆発は目前だ。一足先を歩く私達は、何を語るができるのか。課題は明確であった。当地のトップ校であるモンゴル国立科学技術大学の協力も得られ、モンゴル研修が成立した。別にアジアでなくてもいいのである。学生に見せたいもの、触れさせたいものがあるところにいく。これが基本である。今はそれがアジアにある。これが、アジアを選ぶ理由である。

3. 研修は何を学生に与え、学生は何を学んだか

最終日に学生が泣く。たった1週間の付き合いしかない、初めて出会った異国の学生と抱き合い、別れを惜しんで泣く。この描写以上の評価の仕方が思い浮かばない。1週間で学べることはわずかでしかない。そこに結果を求めても意味がない。久しぶりに流した涙は、参加者の一人ひとりの心に何かを残したようだ。その何かは、フェイスブックなどを通じた終わらない交流に結びつき、一人ひとりに人間力と国際力の学びの始まりを与えている。



研修の最終日から：別れと始まり